

広報 子ども いまばり

～ぼくらのふるさとの魅力ってなんだろう～

今治魅力 発見 プロジェクト 今治市立別宮小学校 令和6年度 6年生
発信

次の世代へ継いでいく



延喜獅子舞保存会

近藤 正志 さん

人の上に人が立ち、獅子頭をかぶって獅子を舞い、三継ぎ、四継ぎと高くなっていく継獅子。その継獅子を延喜で引き継ぐ一人。

継ぎ獅子の始まりはいつですか

継獅子が始まったのは江戸時代。始まった理由は、昔の人の考えで五穀豊穡を神様にお祈りのために継ぎ獅子をして、上に上に神様により近いところをお願いしようという気持ちがあって始まったと

言われてます。だから、3段よりも4段、5段って高くしていったみたい。

継ぎ獅子をやっている中で 大変なことは何ですか

基本は楽しいけど、一番上に子どもが乗るから子どもをけがさせてもだめ。適当にして本番失敗してもだめ。子ども、子どもの親、家族もいるし、せっかく預けてくれてるから親にもいい思いをさせてあげたい。厳しくするところは厳しくするけど、楽しい思いをさせてあげられるような練習や本番を迎えられるような気持ちでやっていくことかな。

継ぎ獅子を続ける中で大切なことは

ずっと続けていく伝統芸能だから下の子、下の子が楽しい、またやりたいと思ってもらえるようにすることが大切。楽しいっていうのを伝えてあげたいし、かといって楽しいだけでもない。いろんな芸があるからそれも引き継いでいってもらいたいし、教えることもある。教える中で、できたときに心から楽しかったって思えるようにすることが大切。

どんな思いでやっていますか

やっぱり楽しみたい。嫌なこともいっぱいあるし、練習やったら揉めることもある。けど成功したら気持ちがいい。バレーボールでも練習して試合で勝ったら嬉しいやろ。そういうのを味わいたいけん、それを目指して日々練習しよる。怒られながら練習して試合でそれが出来たら嬉しいし、練習の成果が出せるように日々練習しよる。

あなたにとって継ぎ獅子とは

自慢できること。今治の伝統芸能で、愛媛県の無形民俗文化財にも選ばれているし、自信持って色んなところに広められることとしてますっていうのが自慢できるところかな。

インタビューを終えて

近藤さんとお話をして、今まで知らなかったことや、感じてこなかったことがたくさんありました。近藤さんの話す雰囲気や言葉から継ぎ獅子が楽しいものだということを感じました。このインタビューを終えて、延喜獅子舞保存会の継ぎ獅子を見に行きたいと思いました。

世界に伝える今治の船



新来島どつく 社長

森 克司 さん

愛媛県今治市大西町にある100年以上続く造船会社「新来島どつく」で2023年10月から社長を務める。

どんな風にチームで協力していますか

造船所は沢山の人で船を作っています。最初に営業の方が、お客さんのご要望を聞いて新しい船をイメージして、それを設計の方が具体的な船の形にします。お客さんに喜んでもらえる形だったら、

今度は船を作るための細かな設計作業を行っていき、造船所の現場で船を作っていきます。野球に例えますと、それぞれのポジションで役割が違いますが、まずは自分のポジションでの役割をしっかりと理解し、自分として全力でその役割を果たすことです。それぞれがベストを尽くせば、結果としてチームプレーができると思います。造船所ではまずは営業がお客様のご要望を正確に引き出し、自社の能力に応じた最適な船を提案して、仕事をいただき、満足していただく船を作り上げます。その時、営業は自社の現在の状況を理解し、設計・造修はお客様の要望を把握し、自社ベストを尽くすよう連携をとりながら造り上げます。

これから100年200年続けていくために大切なことは何ですか

時代の変化、環境の変化に柔軟に対応していく。しかしながら、変えてはならないものもあります。(自主性、独自性)未来へと継承しなければならないものもあり、これをしっかりと持ち続けるということが大切です。地元を愛する気持ち、船づくりを楽しむ気持ちを持ち、お客様の笑顔を活かに地域に貢献し続けることが大事です。

今治にとって造船とは

地域を存続発展させるために、無くてはならない産業です。たくさんの方々が造船に携わっています。なので、人が生活をするために、この今治市にとっては必要な産業だと思います。これからも地元の方を雇用し、笑顔があふれる街づくりに貢献できる産業であること。これが造船の大きな役割ではないかと思っています。

お仕事で楽しいことは何ですか

みんなが一生懸命、力を合わせて作り上げた船が無事にお客様にお引き渡しできたこと、そしてお客様に喜んでもらった船が工場から出航するときに、みんなで見送る瞬間は非常にうれしく楽しいです。

インタビューを終えて

私たちは、1隻の船ができるのに2年かかることや、1500人もの人が1隻の船に携わっていることを知り、驚きました。この体験を通して、造船にも関心を持ち日々勉強していきたいと思いました。新来島どつくさんがこれからも船をたくさん作って、世界へ羽ばたくことを願っています。

より心地の良い タオルを作るため



渡辺パイル織物 株式会社 渡邊 文雄 さん

今治のタオル会社の1つ、渡辺パイル。
令和6年度21世紀愛媛伝統工芸大賞、あいテレビ社長賞を受賞されています

年間どのくらい生産しているんですか

タオルはキロ計算することが多く、大きいタオルを作ると50万枚くらいです。小さいタオルだと一年間で70から80万枚ほどです。でも、これは全然大きさとか織るものによって様々です。

始めた頃と今では どんな変化が起きましたか

僕が始めた頃、タオルはもちろん知っていたけど、作り方とかどういうところに売れるとか全然わかりませんでした。なので、営業でお客さんのところに行って、自分の工場を見ながら覚えていきました。10年ぐらい経ち、いろいろわかってきて、お客様の要望があって、こういうタオルがほしいという時は、その人達に合うものを考えて提案できるようにになりました。もう少し昔のタオル作りの話をすると、ゆっくりとした機械を使っていました。ずっと同じ糸を使って、機械を動かしていました。どちらかというと、デザインや柄のタオルを織ってるが多かったです。今は機械も進化して、織る速度も速くなり、同じ時間にたくさんのタオルが織れるように進化しました。加えて、昔の機械だったらなかなか織れなかった糸も新しい今の機械だったら織れるようになっていきます。技術の進化でスピードが早くなったのもあり、新しいものがどんどんできるようになってきています。

一番おすすめのタオルは何ですか

なめらかバンガロールというタオルです。インド産の綿を使っていて、とにかくふわふわで、やわらかくて何度洗ってもふわふわになるタオルです。

今治タオルの

どんな未来を思い描いていますか

今治タオルを作っている人達を見て、子どもたちが継ぎたい。みんなのような小学生がやってみたい。って思うような、魅力的なタオルを作っていく、作り続けていくのが僕の思い描く今治タオルの未来です。

インタビューを終えて

文雄さんと話して、渡辺パイルさんのタオルのことがよくわかり、タオル産業の技術の進化にも魅力を感じました。なめらかバンガロールも、かなりこだわって作っていることがすごいと思いました。タオルの一年間の生産量が万を超えているのは渡辺パイルさんが積み上げてきた気持ちかものと思いました。これからも、今治のタオルがもっと違う地域にも知られていくことを願っています。



数少ない女性の鬼師

株式会社菊銀製瓦 鬼師

黒瀬 晴香さん

創業明治12年、150年近く続く株式会社菊銀製瓦で、鬼瓦を作る数少ない職人の一人。

菊銀製瓦の会社の名前の由来は

明治12年に初代・菊地 銀太郎が株式会社菊銀製瓦を創業したことが始まりです。その名前の菊池の菊と銀太郎の銀を取って菊銀製瓦という会社の名前になっています。

鬼瓦を作るときと普通の瓦を作る

ときの違いはありますか？

普通の瓦は機械で作れるけど鬼瓦は機械で作らずに人の手によって一個一個丁寧に作っています。鬼瓦は細かい部分が多いので、人の手でないとつくれません。

これから瓦づくりを通して

どうしていきたいですか

瓦は、ネガティブなイメージがあります。それは、地震などの災害で危ないから嫌だ。というネガティブなイメージがあるけど、それは瓦だけの問題じゃないのでそういう瓦のネガティブなイメージを無くしたい。最近いろんな業種の方とお会いすることが多いのですが、みんな自分の会社だけでなく今治がどうしたら素晴らしい町に発展するかなど真剣に取り組んでいます。これから今治という町はどんどんよくなっていくのでは思います。

女性の鬼師は少ないのでは

たぶんあまりいないと思います。でも私自身では女性だからとか性別のことは考えたことはないんです。それと作品も女性らしいとよく言われます。細かいところまで丁寧に作られていて繊細だ

といわれます。これは私としてはいいところだと思っています。鬼は激しいものですが、雑になってはいけないと思うんです。力強さと繊細さを兼ね備えた作品を作っていければと思っています。

なぜ鬼師になろうと思ったのですか

もともととにかくを作ったり、絵を描いたりするのが好きだったんです。たまたま家が瓦屋で祖父が鬼師だったんです。小さいころからその仕事を見ていて漠然と鬼師になりたいと思っていたようです。ごく自然にこの仕事についていました。

インタビューを終えて

黒瀬晴香さんのおかげで僕達は、株式会社菊銀製瓦さんの記事を書かせていただきました。普段学べないことや、そんなに知られていないこと、菊銀製瓦さんの名前の由来も、鬼師が、鬼瓦以外に何を作るかなど、鬼瓦を作るときと普通の瓦の違いがわかりました。僕らは、同じ今治の中にいながらも、菊間の瓦について知らないことばかりだということにも気が付きました。だから、瓦のいいイメージや鬼師の数の少なさをいろいろな人に知ってもらって、この今治の魅力が多くの人に届いたらいいなと思っています。

今治鉄板焼鳥で人と人をつなぐ



新味鳥 新子 健児 さん

今治市常盤町で焼き鳥店「新味鳥」を切り盛りする。

なぜ、今治で焼き鳥を作る仕事をしたいと思ったのですか？

焼き鳥屋になろうとは思ってなかったんよ。全然。色んな仕事をしよって、若い時に大阪とか東京とか色んなところで遊んだり、仕事をしたりしたんや

けど。で、うちの親父が焼き鳥屋さんやったんよ。それで、手伝いがてら、他の仕事もしながらちょっと手伝ったりしたら、やっぱり人と話したりとか「美味しい」とか言ってもらえたりしたら、なんかそれが「あっ、向いとんかな。」「楽しいな。」っていう、ちょっと軽はずみなどこからスタートしたかな。そんな感じで、いつの間にか焼き鳥屋さんになったかな。

新味鳥の焼き鳥を知ってもらうためにどんな工夫をしていますか？

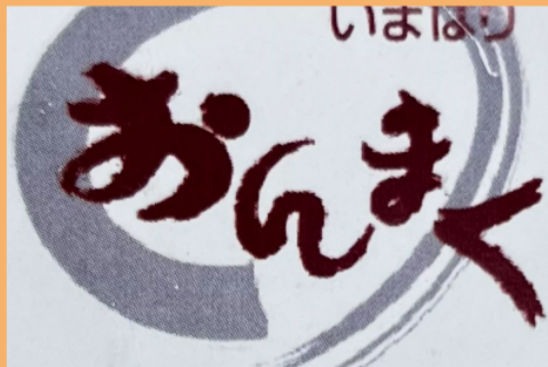
まず、地元の人とか今治に住んどる人らとかとにかくに焼き鳥を通じて話したり接触したりしていくってというのが根にあってそれプラス、色んなイベント事とかにも参加さしてもらって、普段食べてもらえん人にも広めていきたい。で、今週もまたテレビの取材入るんやけど、県民SHOW、あれにまた出るんやけど、で今週また取材、東京からね来たりするんやけど、そういうテレビに出さしてもらったりとかして、色んな人に知ってもらう。でもね、いちばん大切なのは、自分の身近にいる人みたいな人に楽しく美味しく食べてもらうっていうのがあって、これは、何事にも言えると思う。自分の身近な

人を大切にするっていうか。そこからよね、そこから広めていくみたいな。外ばっか見よったらこっちがおろそかになるけん。身近な人も大切にしながら少しずつ広げていくみたいな。

インタビューを終えて

お客さんに「美味しい」と言ってもらえて焼き鳥屋さんになったということを聞いて、人と関わることは大好きなんだろうなと思いました。また、今治の焼き鳥を広めるために、イベントやテレビの取材を受けたりもしているけど、身近にいる人を一番大切にすることというのを聞いて印象的でした。一度新味鳥さんに行って、新子さんが焼く鉄板焼鳥を味わってみたいと思います。

「おんまく」へ熱い思い



今治市民のまつり運営委員長

渡辺 俊 さん

今治市民の祭り「おんまく」の運営委員長。
「おんまく」への熱い思いをもち、支え続けている。

「おんまく」は、なぜできたのですか？

商工会議所がしている「港祭り」と今治青年会議所の団体の「バリ祭」、二つのお祭りが合体して、「おんまく」というお祭りができました。おんまくの会場は、今治とその中心の商店街、市役所周辺の港を

活性化しようと思って、市役所周辺の一つと港で8月の第一週目の土曜日、日曜日におんまくをしています。

「おんまく」にへの思いを教えてください

「今治のお祭り『おんまく』で今治の暑い夏を盛り上げていこう！」と思っています。今治市が元気な町じゃないといけないと思っているので、普段の仕事と会社の仕事とは別でしています。自分の時間を使って、「おんまく」をしています。運営委員長の仕事は、みんなと会議をしたりして、決めることとか、警察さんとか消防士さん達とお話したりします。それは、年間100回あります。大変だけど、「このお祭りをやりたい。自分の周りが笑顔になることをしたい。」という思いでやっています。

地域の方や観光客たちからもらったエピソードはありますか？

たくさんあります。一番印象に残ったのはコロナがあけて、再開したときのお祭りです。演者の出演者がコロナで集まれなくて、二年間練習ができなかった苦労したことやコロナが収まっ

てないのにお祭りをするのはどうなんだろうという批判も受けました。でも、今治のみんなが元気になるために、この祭りを盛り上げていこうという形で参加してくれました。お祭りが終わった後、その団体のお世話をしていたおじさんが泣いていました。その嬉し涙が一番印象に残っています。

インタビューを終えて

インタビューの前は、おんまくと言ったら、「花火」や「踊り」だと思ってました。だけど、渡辺さんのお話を聞いて、おんまくの印象が少し変わったと思いました。おんまくを仕事ではなく、自分の時間を使っておんまくのことを考えていることにおどろきました。おんまくは、「熱い思い」に支えられているのだなと思いました。おんまくは、私にとって大きな楽しみの一つです。これからは、支えてくださっている人の思いに目を向けながら、参加したいと思います。

地域の方たちに 美味しいタレを届ける



株式会社伊藤本舗 山蔵

伊藤 菜々子 さん

三代にわたり醤油・醸造酢を中心にした調味料の研究・開発を続け、地元の方から愛されている。

どうしてこのお仕事を始めたんですか

株式会社伊藤本舗っていう会社なんですけど、その前の会社があって、私のひいおじいちゃんが松山のお醤油屋さんに務めていまして。その暖簾分け今治でその醤油を扱って、お商売するよって

というのがこの会社の始まりです。それが今から90年くらい前です。で、そこからお酒を売ったり、ラーメンの麺も作ってます。その中で25年くらい前、調味料の製造を始めました。というのも、やっぱりこのあたりの土地の味っていうのを自分たちでも作っていきたいなと思いました。愛媛県とか今治市って、調味量の味に特徴があって、ちょっと甘いついていうのがこのへんの人たちが美味しいなって感じる調味料なんです。なので、この土地の方たちにあった調味料を作りたいなということで25年前からタレとかを作り始めました。

タレを美味しく作る秘訣はなんですか

秘訣は4つあります。

1つ目は、「素材が良くないと美味しいタレは作れない。」です。美味しいお醤油、美味しいお出汁など美味しいこだわりの食材を使って美味しいタレを作っています。

2つ目は、「今治の人に合う味」です。地域の人たちが美味しいと感じるようなタレを追及して、みんなが美味しいと思う味を目指して作っています。

3つ目は、「味のブレがないように」です。なぜかと言うと、タレを作るたびに味がかわっていたら

「何か味が違うなー」ってなったらいけないので、レシピどおりに作って、素材が悪くないかをちゃんとチェックをして、いつでも美味しいタレを提供できるようにしています。

4つ目は「事故がないように」ですね。食べたとき美味しくてタレの中に鉄くずが入ってたとか食べたらお腹が痛くなったとか、その時は美味しいけど、後から嫌な思いをしないようにしている。トラウマになって、これ美味しくなかったってなってしまうので、絶対に食べた人が嫌な思いをしないように気をつけてます。

インタビューを終えて

私達は、学校の授業で伊藤本舗さんの焼豚玉子飯のタレを使ったアレンジレシピを作りました。それを食べてみると、とても美味しかったです。購入した人たちには、焼豚玉子飯にタレを使うだけじゃなくて、タレでいろいろなアレンジレシピをしてほしいなと思いました。

この美味しいタレを作れるのは伊藤さんたちしかいないだろうなと思いました。私たち別宮小学校の地域の誇りです。

音楽で今治の架け橋に



今治ホホホ座 豊島 吾一 さん

愛媛県今治市を中心に音楽活動をする音楽家。
今年、11月にハズミズムという親子どちらも楽しめるイベントを開催する。

豊島さんのやっている楽器は何ですか

ぼくは、スチールパンという楽器をやっています。
スチールパンは、ドラム缶をへこませて作る楽器で
スチールが鉄、パンがお鍋という意味です。

音楽をやっていて自分が変わったと思うことはありますか。

自分が変わったことは、たくさん人と出会うようになった。たとえば演奏する人、その演奏を聞きに来る人、スチールパン仲間といったいろいろな人と出会うようになりました。

音楽をやっている中で、特に思い出に残ったことは、何ですか

僕は、東京の大きいホールで演奏したことが特に思い出に残っています。あとは、さっき言った通り、いろいろな人と出会うようになったのが思い出です。あと僕は、ワイワイスチールバンドというバンドに入っていたことがあり、ワイワイルチールバンドっていうのは、全国からスチールパン仲間が集まり、30人くらいで演奏したことも思い出です。

豊島さんにとっての今治とは

僕にとっての今治は、出身地でもあるから大切な場所です。音楽家を他の場所でなく、今治に呼ぶことが大切です。四国っていうのは、音楽家が来にくい場所になっているんです。それを僕が呼んで「あ、四国っていいな、今治っていいな」と思ってもらい、その呼んだ音楽家に「四国はいい場所

だよ、今治っていい場所よ。」って広めてもらっていろいろな音楽家に来てもらって、「今治いい場所だな、過ごしやすいな」というのが理想の今治です。

インタビューを終えて

豊島さんにインタビューをして、東京で聞いていた好きな曲を今治でも聞きたいなと思ったら、そのアーティストを今治に呼んでライブをしてみようという発想にとっても驚きました。インタビューをしていると、豊島さんの音楽が好きな気持ちが伝わってきて、とても楽しい時間になりました。ライブが開かれた際には、足を運んでみたいと思います。

おいしいみかんを届けたい



みかん農家

村上 富士人 さん

今治市延喜でみかん農家をしている。園地では、9種類のみかんを栽培している。

みかん農家で一番楽しいことは何ですか？

苦勞して作って収穫するとき。食べてくれて「このみかんは美味しいね」と言ってくれたときが一番楽しいというか、嬉しいね。

地域の自然環境で困っていることはありますか？

まずは鳥獣害。鳥とかイノシシ、あとハクビシン。鳥類のヒヨドリとカラス。それに一番農家の人は困っています。特に今年度はイノシシがひどかったです。大西、菊間、乃万地区だけではなくて。みかん山見たことある？ワイヤーメッシュ柵をしたり、電気柵にしたりして工夫しています。でも、イノシシがつきやぶって来るので、それで農家の人は苦勞しています。イノシシは木を折ってしまうので、それでやられるところもある。実が青いうちから。10月くらいからかな。色がついて来てからは、鳥。ヒヨドリやカラス。次に、気温。去年の夏、その一昨年は気温が高くて、大変苦勞した。当然温度が高いと、実が日に焼けてしまう。日に焼けてしまったら、固くなって商品にならない。甘平なんかは裂果してしまう。今年と去年は大被害をうけた。売っているのも高かった。できても数が少なかった。あとは、突発的に降る大雨。何回かに分けてちよつとずつ降るんがええんやけど。1回にドバツと降るやろ。それで裂果したり味が薄くなったりとかね。それで大変苦勞した。気象の関係。高温、大雨で非常に困った。

これからみかん農家としてやりたいことはありますか？

化学肥料をなんかを使っている回数が多いので、できるだけ化学肥料を減らして、有機農業をやってみたい。県が進めている特産品の紅まどんなや甘平、紅プリンセスとかいいものを作っていきたい。今回ハウスを増やして、園地の環境を変えていい品物を作ろうとしている。紅まどんなは、雨に濡れたら傷みが早いので、時期が来たら、雨に濡れないようにしている。そうすると、いいものができるので、そういうものを作っていきたい。紅まどんなに限らず、甘平やせとかにしても同じ。

インタビューを終えて

インタビューを終えて、富士人さんのように自然環境(鳥獣害や天候)に困っているみかん農家さんが多くいることにおどろきました。そんな大変な中でも、みかんの栽培で色々な工夫を重ね、よりよいみかんを届けようとする思いが印象的でした。作るのは大変だけど、食べる人が美味しそうに食べるのを考えると栽培するのも楽しいということがインタビューから伝わってきました。

今治とともに歩むタオル



井上タオル株式会社

井上 裕基 さん

3代にわたり続いてきた井上タオル。70年間今治タオルのブランドや会社を守り続けている。

ふわふわなタオルをつくるには、何が必要ですか。

まずは、原料として糸がいります。綿花は、一般的には、インド、パキスタン、中国などで綿の木を育てて、一つを積みながら、すくってそれをほぐして一本の糸にします。それを何本か使って

タオルができます。そして、タオルには色んな色があるので染という工程があります。それから、さい色といって白が基本なんですけども、いろんな糸から紺とか紫とかブルーとか色んな色に染めて、それを織っていくと言うような工程ですね。

一番大変な作業はなんですか。

タオルを使う時期が決まっているんですよ。例えば、明日試合があります。明日用意しなければ、無駄になる。納期っていうんですけど、それを守らないといけないっていうのが大変ですね。

この仕事は、井上さんにとってどのような存在ですか。

おじいちゃんからお父さんで、わたしは三代目なんです。やってきて70年ぐらやっていって、おじいさんの時からタオルメーカーとしてのずっと続いてきた歴史を担っているという感じですね。

井上タオルと今治タオルの未来について教えてください

今治タオルのブランドも今年で19年目になりました。メーカーとしていいタオルを作っていくのはもちろんなんですけど。みなさんが失望するようなタオルを作りたくないの、いいタオルを作っていきたいというのがメーカーとしての思いですね。

インタビューを終えて

最初、タオルは簡単にできるだろうと思っていました。でも、井上さんのお話を聞いたら、タオルを作るのに多くの時間がかかり、大変だということが分かりました。また、お客様のために、納期を守る大切さを話されていたのが印象的でした。あと、井上さんが今治タオルのブランドや代々続く会社を守り続けようとする思いも忘れられません。私たちの身の回りに今治タオルはたくさんあります。でも、取材を通して、一つ一つのタオルに作っている方々の思いが詰まっていることが分かったら、タオルへの見方が変わってきたと思います。

サイクリングの 楽しさを発信する



地域おこし協力隊

倉瀬 満帆 さん

愛媛県東予市出身。
今治市役所サイクルシティ推進課で今治サイクリングの魅力を発信。

今治サイクリングのどこが好きですか

景色が好きです。海の上を走るのは他の地域にはない。今治には海も山もあるから色々な角度で自然とか地域の特性を自転車を通じて、楽しむのが好きです。県外や海外からサイクリストの人が来て

くれるから交流の拠点でもあるなあと思っています。今治のサイクリングの仕事をしていたら、周りから人が集まってくれて色々な話を聞いたり、一緒に知ったりするのが楽しいです。

みんながもっとサイクリングを楽しめるようになるアイデアはありますか

自転車が楽しいと知らない人たちに「自転車楽しいよー」っていうのを伝える活動をしていきたいなと思っています。でも、そのためにはいきなり「自転車乗ろうよ」って言っても「自転車ってしんどいじゃん」「日焼けしちゃうじゃん」とか、楽しい事だけじゃない様子もあるんですよね。そこをどうしようかなと考えます。例えば、健康とか美容とかすでにある興味の中で健康とか、ダイエットのために「自転車に乗りませんか？」とか実際に日光って日焼けしちゃうけど、お肌の活性化のためとか美容のためにも日光を浴びるのも大切っていうのを教えてあげる。あと、ママチャリで参加できるサイクリングイベントや自転車のご当地ヒーローがとほのかな、と日々新しいアイデアを考えてます。すでにみんなが興味のある要素の中から自転車につなげていくっていうのも、これからの活動かなと思って取り組んでいます。

サイクリングの仕事をしていて大変なことはありますか

今治市内の陸地部のサイクリングコースを作っていて、何もない地図から自分でルートを考えてコースを作るのが大変です。PRしても、今治に遊びに来てもらうには時間やお金とかのハードルがついてきてしまう。それは、自分一人の力では乗り越えられない。なので、行政の力だったり、ツアー会社の力だったり、自分以外の人にも頼っていかないとけない。そういうところで、色々な人の関わりを持ったりとかつながっていくことが必要です。そういう一つ一つは、根気がいる仕事だなと思います。

インタビューを終えて

満帆さんの話を聞いて、サイクリングには どのような魅力や楽しさがあることがわかりました。今治のサイクリングでしか味わえない景色があるのが魅力だと思いました。今後も、今治でサイクリングをする人が増えてほしいなと思いました。

みんなに届けたい有機野菜



有機栽培農家

丹下 隆一さん

丹下さんは有機栽培農家でみかんやニンジンなどを育てています。
自然の力を大切に美味しい野菜や果物を作るために努力されています。

丹下さんが育てるコツは

光合成が大事にしていますね。光合成をどうやって利用するかを考えていて、うまく光合成できたらうまいものができる。うまくできなかつたら 甘くないという違いがある。あと時期があって、夏頃の大根は

中々甘くならない、それはしょうがない。冬の大根だったらちゃんとできたら甘い。必ず甘い！

有機栽培を始めたきっかけは

東京に行っていたときに、友達から「普通に出荷するものは農薬を使っているけど自分のところで食べるものは農薬は使わない。」と言われた。そこから、農業するんだったら有機農業の方がいいと気が付いて、有機栽培の仕事をするようになりました。

畑をどれぐらい所有していますか

広さで言うなら1,5ha。専業で農業をやったらそんなに大きくはない。150aのうち20aが、みんなに見学してもらったところ。みかんもあるし他の野菜もある。うちは、ニンジン、キャベツ、ゴボウ、ダイコン、柑橘はほぼ全部。みかんから始まってレモン、かんぺいも作っているし、紅マドンナも作っていますね。

どのような農薬を使っていますか

例えば、BT剤という納豆菌の仲間の微生物を利用した農薬を使っています。

みかんを植えたら収穫まで

何年かかるんですか

みかんは実ができるのに5年もかかる。みかんは土を変えようとしても変わらないから制限がある。1回木を抜いてしまったらまた、5年かかる。また新しいみかんを植えても5年たたなきゃ何ができているかがわからない

インタビューを終えて

丹下さんは、有機栽培に熱心で、野菜には農薬を1から6種類だけの農薬。みかんには1・2種類ほどの農薬しか使っていないのがすごいと思いました。丹下さんがみかんの木を植えて、5年経って実がなったときに、やっと新種のどんなみかんができたかわかるという話をされていてびっくりしました。丹下さんから野菜をいただいて食べてみました。ダイコンは上の方が甘くて、下の方が辛くて、キャベツ・ニンジンに噛めば噛むほど甘みが出てきてすごくおいしかったです。僕は、また有機栽培の野菜を買ってみたいと思うようになりました。

船を国内に送り出す



山中造船株式会社

黒河 保 さん
公文 瞭 さん

愛媛県今治市の大島で船を作っている。今まで国内向けの船を多数送り出してきた。

お客様との 嬉しかった思い出はありますか？

やっぱり竣工するとき、船が出ていくとき、見送るとき、完成して会社を出ていくとき、あと日本の港とか瀬戸内海を走っているときを見ると、自分の作っ

た船が日本の海を走っているという、例えば全然仕事とは関係ない状態でいったときに、いつ作ったかとか、作ったら覚えているもので、それは嬉しいなって。お客様との嬉しかった思い出っていうのは、やっぱり感謝されるとき。いい船を作ってもらったというような言葉もらおうと、いい思い出になります。あと、もう一つはどうしてもトラブルっていうのがつきものでね。いろいろなトラブルをお客さんと一緒に解決してって、最終的にトラブルを解決するか、お客さんと一緒に歩んでいけるっていうのが楽しい思い出になっていますね。

船を作っているときに、 大事にしていることは何ですか？

私は、お客さんに対して誠実に船をつくっていくと、やっぱりこう注文住宅というわけではないんですけど、やっぱりオーダーがあるので、それに対して費用も含めて誠実に対応していく。でも、なおかついい船を造るっていう、それはいろんな各部署で手を抜かずに、しっかりとした船を造っていくと。その中には、管理監督してもらわないといけないし、チェック機能もいるんですけど、そういうのもきちんとして日本の海に出していきたいなと思っています。

山中造船として、どのようなことに挑戦 したいですか？

いい船やと言われるような船をつくるのを目指して頑張っていきたいなと思います。あと、基本的には挑戦っていうのは毎日挑戦だと。毎日挑戦ぐらいの気持ちでおらないかんかもしれないのんやけどね。時代のニーズに合うような船舶の建造、あとはそのお客さんとか誰かと一緒に新しい船の開発やったりとかそういったものができればいいと思う。なかなかちょっと現実にはなっていないんですけど、やっぱりニーズにあった船やちょっとこう独特な船とか特殊な船とかそういったものを造っていけたらいいなとは思っています。

インタビューを終えて

山中造船で働いている人たちは、「お客様のために」という気持ちを大切にしているということが伝わってきました。トラブルと聞くと、大変なイメージがありますが、それを解決してって、楽しい思い出になっているというのも印象的でした。

今治の魅力を伝えるために



今治市役所秘書広報課(広報作成部)

萩原 由紀 さん
植田 壮 さん

今治市が作る広報誌(広報いまばり)を作る仕事を
されている二人。

今治を一言で表すと？

萩原さん:「ちょうどいい」ですね。

都会すぎなく、毎日満員電車で揺られて会社に行くことはないです。だからといって、買い物等が不便かというと、そうではないです。普段の暮らしに必要なスーパー・ドラッグストアもありま

す。遊びに行きたい時もしまなみ海道があるから、本州に渡ることもできます。更に、自然もたくさんあります。そういったところが住みやすいところだと思ったので、「ちょうどいい」ところかなと思います。

植田さん:「絶景」ですかね。

最近ドローンを使う機会がありました。普段見る海の景色だったり、山の景色だったり。それは自分の目線、横からでしか見れない。だけど、ドローンで空から見る景色っていうのはすごく良くて、今治はすごくずば抜けていると感じました。そういったところから、「絶景」としました。

観光客の人に伝えたいこと、 してほしいことはありますか？

萩原さん: 景色の良い今治と、美味しい食べ物を存分に楽しんでもらいたいです。でも、たくさん人が来すぎると、自転車の乗り方や、マナーが守れなかったりする。それで、地元の住民の人が困るようなことがあってはいけないと思います。マナーを守って楽しんでほしいということはお願ひしたいと思います。海外の方とかにもどんどん来てもらいたいです。けど、ゴミを捨てる場所とかがわからなくて汚してしまったりとか、そういったことがないように、伝え方も考えないといけないなと思います。

植田さん: ほとんど同じになってくるんですけ

ど、やっぱり今治って素敵な場所が多い。なので、観光に来るにしても、1泊とかでなくて、2泊3日とか、3泊4日ぐらい来てもらうほうが、いろんな島とかを回れるので。1泊じゃなくて、いっぱい連泊してほしいと伝えたいです。

インタビューを終えて

萩原さんと植田さんは、広報作成部として今治の魅力にたくさん触れているお二人です。そのお二人の「観光」という視点から見た今治への思いを聴き、改めて今治の魅力を見つめ直すことができました。今治はとても素敵な場所で、全国や海外にも誇れる場所だと思います。これから、もっと今治の良さが広がってほしいという思いが強くなりました。また、授業や取材を通して、いつも何気なく読んでいた広報いまばりが、どうできているか、どんな思いをされながら作っているのかなど、色々なことを知ることができたことも印象的でした。

今治の未来を育てる



今治市立別宮小学校校長

山川 博一 さん

今治市立別宮小学校の校長を務める。
「仲良く 励め」の校訓のもと、子どもたちと日々明るく元気に接している。

今治でおすすめ観光スポットはありますか

来島海峡大橋が好きなんです。家が近くて、海の景色をよく見に行ってたんです。海にいとホッとします。海の近くで育ったせいでもある

と思うんですけど。あと温泉も好きです。鈍川温泉が特に好きです。そんなに賑やかじゃ無いんですけど、落ち着いた雰囲気が好きですね。

今治の未来についてどう思いますか

なにかを変えていこうとしなければ衰退していくと思います。現状でいいやと思ってたら多分後退していくと思います。世の中は進んでるから。昔、若い頃に私も言われたことがあります。あと10年20年先の未来に中心となる若い人たちがここをいい街だと思わなければ多分衰退すると思います。私も「今治のいいところを探そう」ということは授業の中でやってきました。よその人に教えてあげようっていうのは、実践してきたので、そう感じてくれる若い人たちが増えることと、その先、私たちが年を取って、若い人を後押ししてあげれるような街になったら、明るい未来が待ってると思います。現状でいいやと思ってると人が増えてくると衰退してくると思うので、みんなで変えていきたいです。

今治で美味しい食べ物は

何だと思いますか

今治では普通に食べてたけど、よそに行ってるのは、お魚が美味しいということです。特にお刺身で食べると美味しいです。来島海峡で取れたお魚の刺し身って他とは違うんですよ。味が違うなあと思いました。あと今治のみかんは美味しいと思います。同じ愛媛みかんでも県外に売ってる今治産より、地元で買ったみかんの方がおいしいです。同じ今治産って書いてるのに。甘さが違います。広島で売ってる愛媛みかんを買ってもやっぱり違う。やっぱりこっちで買ったみかんのほうが美味しい、そんな気がします。

インタビューを終えて

いろいろな質問に答えていただきました。私が心に残ったことは、今治の未来についての質問の中の「あと10年20年先の未来で中心となる若い人たちがここをいい街だと思わなければ多分衰退する。」という部分です。私も将来ここに住む人すべてが、この街をいい街だと思えるような活動に取り組みたいと思いました。

今治の魅力をともに歌う



シンガーソングライター

田中 慈人 さん

岐阜県美濃加茂市を中心に音楽活動をするシンガーソングライター。今年、美濃加茂市市政70周年記念ソングを手がけた。

田中さんにとって歌とは

いつもの言葉をちょっと特別に、ちょっと大事に味わえるひとつの方法かもしれない。しかも歌う人、聴く人、それぞれが好きなように味わえる。ひとりで味わってもいいし、誰かと一緒に味わってもいい。

それができる歌は好きだなあと。普通に喋れば「めっちゃやわらかくてさ！気持ちいいねん」「外で干した後のあの感じが好きでさ」「自分の子どもとお風呂に入って、上がったらわしゃわしゃってバスタオルでふく時が幸せで」なんてことを、「ふわふわ」という言葉から味わうことができる。話すこと、語ることも好きで、それが時に、歌であるってのもいいよね、と思います。

「ぼくらのふるさと」には どんな思いが込められていますか？

自分にとって大事な仲間が生まれ育ったまち、住んでいるまち、今治。知れば知るほどに、そこにはたくさんの人たちが暮らしているし、それはずっと前から続いている。昔から「今治」と呼ばれた場所。ある時から急に「今治」と呼ばれるようになった場所。色んな今治が少しずつ広がって、馴染んで、ちゃんと今の今治になっているし、きっとこれから次の世代、また次の世代と、よりそうなっていくんだろうなあと思える。島と街、街と島。自分とまち、まちと自分。それぞれの場所から見える景色があって、それをひとつひとつ想像して、「ああ、全部自分の中にある今治だなあ」と思える曲。そして、聴くたびに、口ずさむたび

に、この曲を作る元になった6年生みんなの顔が浮かんで来て、そんなみんなが今日も暮らしている今治がまた、僕にとって特別な場所、ふるさとのひとつ、と実感できる。この曲が“自分のふるさと”だと思える人たちがたくさん広がって、その人たちが幸せであつたらいいなあと思います。

インタビューを終えて

田中さんと別宮小学校の子どもたちが出会った日、みんなでたくさんの中治の魅力を言葉にしてみました。みかん、焼豚玉子飯、サイクリング…これまで持っていた具体的なイメージがどんどん湧き出てきました。けれど、それは同じ言葉でもそれぞれの違ったイメージを持った言葉でした。それはメロディーにのって、歌詞になっていく。そして、歌として完成した瞬間に、みんなのイメージがふわっと重なっていく気がしました。田中さんの歌への思い、今治への思いを改めて聞いて、この歌がどこまでも広がっていくといいなと思いました。